

たはら 歴史探訪 クラブ 其の34

TAHARA
History Inquiry
Club

伊勢街道は海に沈んだか？

以前、田原の道を紹介しましたが、今回は表浜を通っていた伊勢街道に目を向けてみましょう。

伊勢街道とは通称であり、近世、江戸幕府によって設置された東海道とは異なり、政策的に設置されたものではなく、往來の必要性から自然発生的に生まれたものです。つまり、古代以降現在に至るまで存在した、伊勢方面に向かう「道」の総称と言えます。

したがって、実際にどこを通っていたかは、時代時代で異なるでし



旅人が目指した伊勢はこの向こうに（太平洋ロングビーチから西を写す）

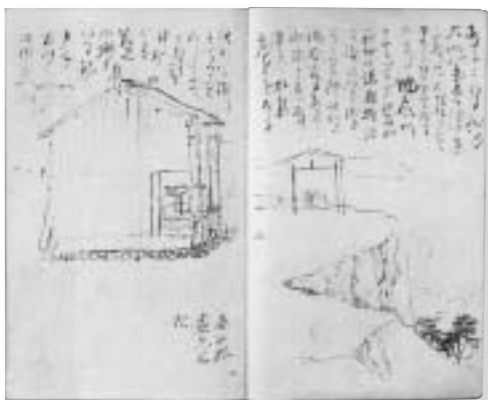
ではなく、自由に開ける可能性を与えられていたのでした。縄文時代から中世まで、渥美半島は東西を結ぶ拠点として、また東国への通過経路として大変重要な場所であったのです。

それを裏付ける古文書が残されています。それは、田原城主の戸田氏が豊橋市の東観音寺へ送った天文5年（1536）の古文書で、その中に、赤羽根に關所があったことが記されています。それには赤羽根に設置した新しい關所の通行料の権利を、東観音寺を造るために

寄進すると記されているのです。道者十錢、順礼五錢、高荷二十錢、乗懸十錢」とあります。恐らく道者、順礼は伊勢參詣者と參詣の代参者である修験者で、高荷、乗懸は運搬をしていた者を指すのでしょう。この古文書から、当時かなりの人々が赤羽根を通過していたことが知られます。

車社会に馴れたわれわれの感覚だと、足元が悪く、潮もかぶるような海岸線ではなく、道は国道42号線のように高台の上にあったと思っ

しまいます。しかし、伊勢神宮への往來を目的としたら、平坦な海岸を歩いたほうが合理的といえます。当時は海岸が広く、ちょうど静岡県の白須賀辺りのように、汀線から崖下までの間に、樹木も畑も、家屋も建てられるほどの距離があったことでしょう。例えば、渡辺華山が赤羽根町の中村から太平洋ロングビーチあたりを描いた有名な遠見番所のスケッチには、崖下に松の樹影が見えます。このように、かつての伊勢街道には樹木が生えるような自然堤防があり、土壌も安定し、木陰もあつた快適な道だったのかもしれない。（増山）



華山が描いた赤羽根の浜（崖下に松らしき樹影が）

生涯学習課 ☎ 23局35331